

論題	松平造酒助江戸在勤日記一元治元年九月二日～九月十一日一
著者	根本佐智子・古宮雅明
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第42号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2015年(平成27年)11月
判型	A4(210mm×297mm)

【資料紹介】

## 松平造酒助江戸在勤日記

—元治元年九月二日—九月十一日—

根本 佐智子  
古宮 雅明

【第二冊途中より】（元治元年九月）

同二日

晴天、從者具足蒸氣船御預之積之処、朔日為上先ツ目形書出候様申来候  
二付、私分御組とも四棹二入大混雜、昨日より拾着二相成候間、着し候  
得共、甚暑大汗二相成候、例刻出仕色々御用有之、山岸席太一方取調二  
相成、私共隙二相成候、是迄極置候事委細席太申達候、御用処より被申  
達候、御用有之二付出候様藤弥呼継二付出候処

今度 御出馬之節一組召連、一ノ手被 仰付候、

退畏候趣御請いたし候、一ノ手ハ石井与一右衛門・吉井助之進、寄合組  
大砲頭酒井吉弥・松宮源五郎尔今登候二付、着次第可被仰付候、私・新  
徴組・権十郎殿

二ノ手、陶山白兵衛・黒谷寛太・寄合組大砲頭ハ中村百度、今一人ハ誰  
被仰付候哉不分、藤弥主馬<sup>ハ被仰付候</sup>、尔今着不致候故着次第、兵部殿

三ノ手尔今不分、被仰付候人々ハ、寄合組大砲頭喜原文蔵・石沢勝兵衛・  
軍鑑三營役兼被仰付候

御家老衆被引候二付退出、帰候処御組世話役尔今長持詰居、漸出来一同  
呼出し、一ノ手御供 被 仰付候義申達候、一同大悦、悦候義は先達よ

り沙汰世常噂にて、既私権十郎殿へ沙汰通杯<sup>ニハ新徴先陣ト</sup>と相成候ては一藩之氣折、

且御家にてさ様之義有之候間、不相濟義と申述候次第も有之二付悦ひ候

御物頭 同 大砲頭 同 御組頭 同 新徴頭役 一番組 同 二番組 同

三番組 御中老

一、馬之事二付席七呼、先生へ頼置具候様頼二付、明日早々初て率行候  
様ニト弥七へ申付候

一、丸子より至来之コンへイ糖余り甘過候二付、伝吉へ遣度存居候処、

幸御飛脚立誂候

【キーワード】

松平造酒助 庄内藩 元治年間 江戸市中取締 新徴組

【要旨】

当館所蔵「松平造酒助江戸在勤日記」の翻刻。筆者松平造酒助は庄内藩士、家禄は千四百石。組頭や家中武器取扱掛をつとめた人物である。造酒助は元治元年八月より慶応元年八月まで江戸に在勤している。本稿は元治元年九月二日から同九月十一日まで、全五十綴のうち、「二」の途中から「三」を掲載した。庄内藩江戸屋敷では第一次長州征伐発進の準備が進められているが、造酒助はその対応に不満を述べている。江戸市中で見かけた外国人の姿など随所に入る挿し絵が興味深い。

一、神田橋二通り筋セキタ店有之二付為整、伝吉へ遣候積ニて取寄候得共、能分無之返し候

一、打団羽ハンコイ板ハル今整兼候

一、何廉整上度候得共、大混雜ニて考も何ニも氣付不申、神田橋への往來道尔今覺不申、道々色々義考不氣量者別て心配ニ御座候、登前ニは廻方控等早速覺申度心組もいたし候得共、案外之事出来、実ニ不容易国ノ大事不過之、忙然として居候様御座候

物好等一切相止一銭タリ共懷中ニ入申度、私斗義ニ無之、一組ト和合忠心為義当役第一、藤弥組模様自分も折々嘸いたし、実ニ困候事ニて氣之毒ニ御座候、此度一組へ御貸付郷夫三十七人へ笠・半被貸付候事、世話役集自分拵之積、櫃等ハ申付候由、笠同様笠印三ツ星黄塗ニて伊

三郎塗之積、半被印いづれ染屋申付候由ニ、世話等集為絵候積、私工面いたし候ハ、勝虫可然候間、墨ニ染シフ染可然と申付候、少シは儉約致度、相成丈用金不費様ニと申含候、藤弥組トテモ私組之様ニは相

成間敷



半被如図  
ヌ地

一、此度蒸氣船へ先荷物従者具足人々綿入三ツ位、大炮不殘御預御誂候

積ニて、私分ハ長持一棹、従者具足、外引出櫃一ツ、御組は三棹ニ従者具綿二ツ三ツ位ツ、入候斗、夜具之義ハ尔今不相分、私心ニは四五

人へ馬吉疋ト調、御小性頭迄申述置候得共如何可相成哉、綿入等は沢山持候事逆も不相成、発着之節ハ陣羽ニ付具足下着、道中之分ハ割羽

織一ツ、紋付袴一ツ、綿入紋付一ツ、下着二ツ、肌子三ツ位、下帯五ツ位、足袋白紺とも五六疋、大体右之通持候心組、夜具之義、尔今不

分異国ニてケ様之節包マリ伏候羅紗二間位ニ忝間位アタ、カなる品有

之候由、代ハ五兩位之由ニ御座候間、無扱節右之品整候心組ニ御座候、

御発陣之当日は馬は百疋之由、兩三度位ニて馬三百疋御願立ニ相成候

由ニ御座候、巨細事斗申上候、余之義御推察可被成下候、今宵世話役

兩三人参候て荷印工面いたし様申候処、いづれも考屈、其内能茶持参

いたし候者有之二付、勝兵衛呼為吞、白沢駅嘸為致一同腹抱へ大笑い

たし、四ツ過ニ皆々帰

一、作弥上り候て御嘸可被下候、此度難堪一条ハ最早寄合頭撰も不申、

文蔵・百度被仰付、文蔵杯とハ先達て一件之節御人数より早々帰陣い

たし、組下御人数頭ヲ尋兼候義、嘸々庄内へも即風聞早追にて着いた

し候半、其一件、男四・藤弥又は吉弥杯と覺居候ニ付、悪敷可有之と

強て相談いたし候処、空々と相成、此度登候人々も弥撰候人斗登候哉、

千萬無心元、先ツ御心配之事ハ扱方之義ニ有之、追々着ニ相成可申、

其前二兎二角扱振之事を極度と存候処、吉弥心と大相違、吉弥心は余

り強過候て我心ニ合不申昼夜之心配、推察いたし候様能々考候様ニ御

見セ可被成下候

一、巨細申上度候得共、心混乱いたし人ニ被仕掛大ふ文増候も、なき事

斗申上、御叱候程も難斗候得共、少隙ニ書、別て入恐斗ニ御座先以明

三日御飛脚立有之二付奉申上候、益 御機嫌能被遊御座、恐悅至極ニ

奉存候、外若衆達も嘸丈夫孝尽し居候半と奉察候、此方も私初召連候

一同大丈夫過、日々代々他行折々宮筈貴候、私日々神田橋への往来、

一度本町通候斗ニ御座候、馬丈夫御座候、乍恐御休心可被成下候、扱、

登世話相成候人々且見送呉人々礼状遣度候得共、染々御機嫌伺兼候体

案事御無用ニ御座候、

願候ても出来幸ノ登

合、実ニ本望御座候、

今以 公辺ニても幾日

頃御取極無之由、可相

成ハ十二月頃ニ無之、

相成丈早々出陣いたし

度候、此後甘物等之為御登無之様ニ仕度候、庄内居候て沢山ニ有之半

皮等類為登候事無之、不入物入いたし、ケ様之義有之知ならば馬ハ鹿

毛ニても率参候て、道中も折々乗候事出来可申候処、少弱方ニて心配

ニ御座候、外ニ拵不出来大小氣掛のみ、若早々出来候ハ、為御登可

被成下候、来月ニも相成候ハ、世原九右衛門代名前ニて為御登可被

成下候、尤幸便次第、末々幸ニ無之便杯□御詔万一之義有之候ては不

宜候間、無理ニ為御登無之呉々奉頼候、先達て領策へ認申遣候書状廿

一日大混雑中御殿ニて認甚悪敷、書統候ハ、宜御座候得共、殊ニ寄不

分難斗、其時は其時ニ御座候、持参着服等不残御土蔵預置候積ニ男四

と相談いたし置候、先々折角く時氣御厭可被遊候

尚奉期幸喜候以上

九月二日夜九ツ過書留ル

松平造酒助

御父上様

御母上様

尚々外人々へも乍恐丈夫居候趣御喃可被下候

【第二冊終】



先ノ方浅草也

と聞候斗ニて庄内

居同様見不申

向ノ方ハ両国なりと

斗ニ橋見不申

【第三冊】

(朱筆) 「九月十一日立御飛脚同十八日達」

九月三日 昨夜鴈声初て床中二聞

曇朝飯後角之助参ル、色々嘸いたし帰、例刻出仕、色々御用有之、清兵

衛へ頼置候上ケ物御好之鯉さし上披露濟之義、詰所へ出申聞候、今日席

七ノ先生大岡侯ノ藩馬初て遣、能馬と至極誉候由、何分弱候間豆五合増

候様ニと申附候、着之節率馬之事ニ付、常木・高田・鈴木の世話ニ相成

候間、今宵参候様案内いたし候

一、公儀よりの被仰出一同当惑千萬、いつれもナンとも不相成と申斗、

書付多兵衛へ申付上候様ニ申付候、將軍家之御出馬尔今不相分、実困

候義人々の心も少ハナレ候由ニ御座候、今便ニも申上候、私心配馬ニ

御座候、此方模様ハいつれ大丈夫、南部産流行好候由、新庄よふ馬は

忝正も見当り不申、七八千石ノ御旗本も口附兩人ニて乗切いつれも多

御座候、案内いたし、御馬乗暮頃参り、菓子箱持参、料理茶屋へ申付

ル、

吸物

海老薄味噌  
キノコ

砂鉢

さし身  
わさび  
大根ヲロシ

砂鉢

黒鯛栗  
生葱

引皿

ホラ  
百合

右之通地走、色々嘸いたし此度御召し乗馬三十五両位、御貸馬二十兩

位兵部殿注文三十兩位権十郎殿四五十兩位之処注文ニて、明後五日為

見馬参候趣ニ付、私も見候と約し候、

一、岡吉七ツ頃陣羽紋為直候事ニ約し置候故持参、岡吉申事ハ庄内女と

当所之女とう見候哉と尋候間、夫々返事いたし候

同四日

雨天、五ツ頃より雨晴ル、当所いづれも三尺皮有之二付一ツ為拵可申と存、三内へ参り伊兵衛頼、例刻出仕、大殿様先月廿一日御引移相済候義申来、御用所へ出ル、御留守居中役重三郎詰へ参り候二付、頃合尔今不知候哉と伺候処、とんと不相分、此頃御密使相立候京都より御早速度々にて御出馬無相違候義ニ可有之候、公辺にて少二ても御延被成候御趣向と相聞候、御使帰次第御日限は知可申と申聞候、私共最早退屈相成候様ニ御座候、当序大隙ニ相成候間直々清光寺へ仏参いたし候積二三内と申合、藤弥へも頼置候、主馬は道中盛々旅行ニ可有之口説ながら登候半と権十郎殿杯と御笑いたし居候、大勢登候二付仮小屋数軒建候、調二千三百位見積候処余御入費二付兩御殿御居間斗残、不残居候事ニ相成、二百兩ニ相成候由、弟二呼久大夫事申合ル、関兵衛世話共可申候得共、御願之義にて退考事也 此方時候は上昇甚敷、単物着し居候者有之裕も在綿入不揃着服是にて不時候と可申、

一、今日栗毛爪カミ為致ニ神田橋へ遣立派成帰ル

一、暮頃チャンとこ通くと騒々敷、障子明二階上り如何様よふいたしても見不申、其内チャンとてシメリ無張合、庄右衛門例之風にて廿二三日頃より引込居候得共尋不申二付、幸昨日御馬乗案内いたし候処、土産之菓子箱在之候二付持参、六ツ過より参候処、佐土住居初て見無暫く二階二居、最早快近日中二歩行願さし出度存居候と申色々嘸いたし帰

同五日

晴天冷氣、綿入羽織、綿入着し候、庄内最早渡鳥もとれ候半、作左衛門杯とハ磯出懸勝負沢山可有之と考居候、帟七明半時過参り、今日乗合なりとて参、栗毛乗行、権蔵・伊三郎・又右衛門参り着領長持二いたし度と色々相談候二付残し置、例刻にも相成候間、又右衛門と一趣ニ神田橋

ニ参ル、御用格別無之二付明日は天氣能模様二付、権十郎殿へ御用無之ハ朝飯後より清光寺へ仏参いたし度と申述候処、別ニ寄合も無之不苦と被申候間、藤弥へも頼候、今昼後為見馬参り御家老衆御小性頭衆見分趣二付、藤弥私も見物ニ出候積にて引取候、直ニ御厩へ参候得共、尔今是引も不参、天氣能し甚氣詰候間、御馬乗ト申長州屋敷見物ニ乘廻シと趣向、常木先乗馬といたし家来不召連、常木・藤弥・私三人連にて南御門より出、乗切にて太田撰津守殿前通り、小笠前より辰ノ口和田倉御門前ヲ通、川岸馬場先御門辺ニ御旗本供馬駕籠夥々敷待居、八代洲河岸日比合御門近より静ニ乗行、長州屋敷嘸二聞置候得共、無暫く残所無之取壞残居物は青木少々ト矢場形のみ也、夫より又日比谷より入、土井殿脇より大名小路又々乗切、道三橋渡帰、為見馬尔今不参、御馬乗長屋ニ参候処、茶菓子出し暫休居候処、追々集り御居間前御馬場にて見ル、都合十疋余参候、兵部殿・権十郎殿・私とも・政右衛門、四五十兩馬之由なれとも、目二留馬尅疋無之、黒鹿毛相応之馬也、権十殿氣ニ入候模様ニ付進候、最早暮頃ニ相成私共斗帰、道より挑灯付ル、六過ニ御長屋ニ帰ル、重助参居、空腹ニ相成、催促いたし食事いたし、鯛紫蘇も地走大ニ(馳走) 甘食し候、今朝神田橋へ出仕懸、鍋丁より筋向当り、

鍋丁にて造酒助初て日本一大山富士見テ、又右衛門ニ向高山何二と申哉と聞候処、此又右衛門近眼ニテ富士山ノ前山ナリと申、外二連有之候ハ、近眼之又右衛門へ遠山聞候とて嘸笑ハレ可申処、家来共より外二無之獨笑いたしなから四方山嘸いたし歩行ぬ

六日

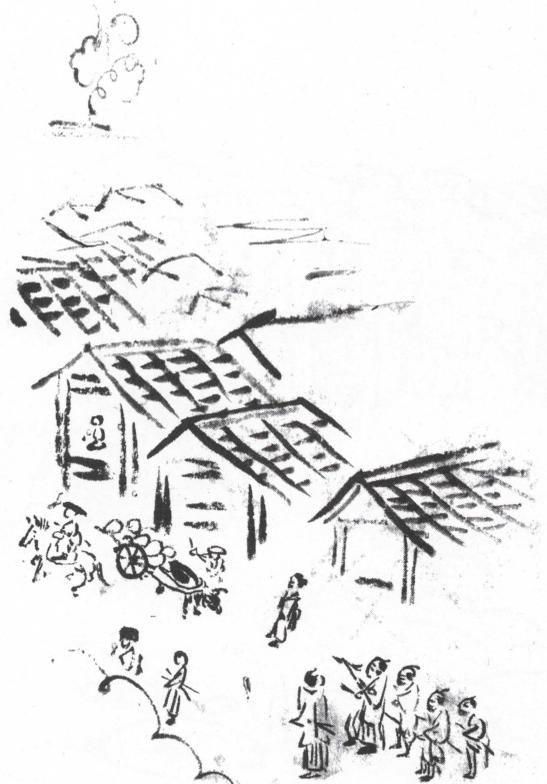
東風明候より吹騒々敷、天氣替り可申杯と小用出、見候事晴夜也、一寝

尔今雪不降候哉  
白山ニ無之

前山黒  
近眼モ  
見エル

富士へハ七八リも有之よふ也絵とハ相違也

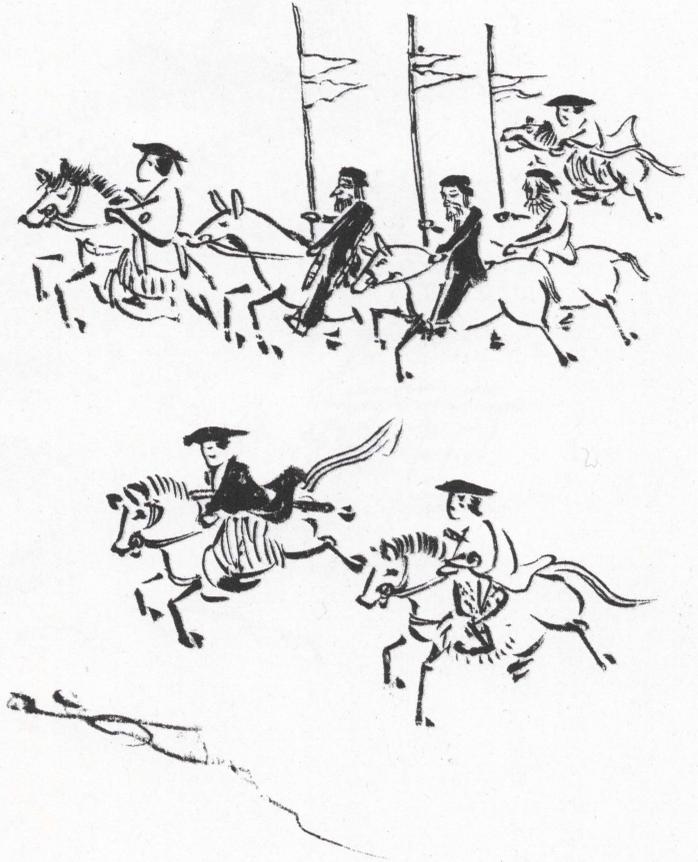
今日は能晴日ニ哉、



造酒助初て異人ヲ  
見ル図

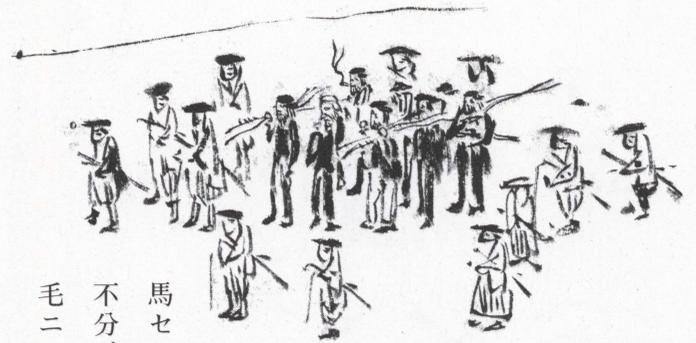


いたし候処夜も明、少し早く起、夫々支度、三内へ早速参候様ニ申遣、  
用向有之権藏・直矢来ル、五ツ過二三内・健三郎誘引来ル、半蔵先二上  
下等為持清光寺ニ遣、其外三人連ニて出掛、召連候者は多兵衛・勝兵衛・  
小一郎・三平、新橋ニて藤弥逢、尚□之義願土手通ル、古手店甲冑店又  
はフタノ切売、大小拵付縁頭店、陣笠杯とハ御望次第、目ヲ驚シブラノ  
と歩行し、道々店々ニ寄、日陰丁通之色々面白物有之、小弓矢沢山有  
之、伝吉へ遣度候得共今日は相止、昼過ニ漸清光寺ニ至、上下着替大梁  
院殿様へ拝し、清光寺初て逢家督祝義申述ル、井天池鯉亀沢山居伝吉へ  
為見候ハ、嘸御菓子なけ面白ガラン、義士墓一見、道ニて英人墨人蘭人  
馬二乗も乗切、又は步行、着服も色々奇妙く、如絵大凡五六十人も逢、  
七八人連ハ沢山也、天氣能保散(散步)出候半、色々物携往来、異馬五六疋見、  
いつれ大丈夫と見ヘル、日本之弓肩負、多葉粉吞ながら行も有之、小言  
ヲ言いながら行在、警固人御旗本ノ二三男之由、日ニ五兩位雇之由、短  
筒いつれも腰之左右ニ在、家々より出候見物人如蟻  
茶屋中食申付一時余待、漸膳出ル、三内・健三郎・私と三人ニて一鉢食、  
替り為取寄候処冷飯不残食し、又取寄セ都合三鉢食いたし大笑いたし、

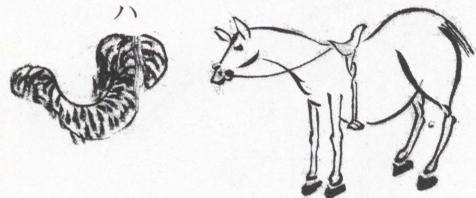


六七十人ヲ見ル、  
蒲萄食候モ有之  
多葉粉吞も有之  
日本弓二張ツ、  
持数人在之、  
服色々位ニて着し候  
品々二分候趣

□□着ヨリ品川房州御台場  
等遠見ノ図  
品川



馬セン何之毛ハ  
不分、鳥之、  
毛ニハ無相違



日本馬と相違也

三内先達冷飯食し道々三内閉口、御地走冷飯出候程事御察可被下候、七ツ前ニ茶屋立出長州ノ中屋敷一見シ目もあてられぬ無慙至極、残候物は  
大踏石のみ、暮も近く相成り候間、早足ニて帰、六ツ時漸下谷へ着、大  
草臥、先刻源吾参り御状達候、

從<sup>(分)</sup>て有難奉拜見候、益御機嫌能被遊御座恐悦至極ニ奉存候、段々御書

中委細拜見仕候、旅中より幸便無之道々御飛脚ならんと思候内、雲助  
走駕籠留兼候事□□位有之、一度ハ後にて開候、一度ハ半  
蔵より悦右衛門迄申進候由道中より一度愚書呈

甚心愚敷着仕候、長道何事無之着し候、道中浪人之懸念いたしてケイ

ール筒六匁筒玉葉身不放、誠案じ登候処、数万之歩兵筑破山へ押寄之  
真最中、いつれ味方大安心、十九日着、会津通辺ニて御国杯より大雨

有之間敷一同嘶いたし登候処、七日之夜より九日無休永雨内川出、家  
来とも不足<sup>(カ)</sup>ニて別御心配被遊、御留守無人之義ハ実ニ安事罷在候、十

六日着候積ニて御案内被遊候由、徳右衛門とか申者上り、信濃川出水  
之義申上御安事被成下候由、初□□大難義、目出度罷下候上委細可

申上候、尔今ニても一□笑嘶ニ相成候、扱、京変之義、如何之訳にて  
小勢ニて大膳之京都へ出候哉、國中ニて混雑出候ニ無相違模様聞候、

国ニて勢揃いたし候節、二三万ノ勢之由、然所三四千勢相成候事不相  
分候、此度檜坂之屋敷より拾候書付三内御長屋ニて見候、二三万之勢

大舟ニて京へ乱入手配実書相違有間敷、齟齬いたし候処は不分、其後  
五ヶ国異舟申合争戦ニ及、下之関港台場大筒とも不残被取、即死五六

千人之由、大敗いたし大膳出降参いたし和睦調ひ候て、横濱異四十余  
参り、此頃応接二日継有之由、色々沙汰仕候、長州と異和結、御征代<sup>(ママ)</sup>

御出馬後、江戸ヲ焼払候趣向之由、此頃御城中ニて横濱奉行下役四人  
召捕られ候由、乍去沙汰ニて突らるゝ事ニは無之、御征代<sup>(ママ)</sup>も如何可相

成哉、十□物は九月□□迄相止可申候、只今細川加賀と公辺色々之御

詫□申事ニ御座候、先ツ以此間応接甚□め不申公辺杯とニては御支度  
杯とんと無之由ニ御座候、扱□廿三日早追着ニて夥々敷騒ニて御動転  
被遊候、嚙々御案事被成候、実奉察上候、早速相分迄御休心被遊候由、  
私草賀<sup>(カ)</sup>ニて御家早ニて胸トキくいたし着候義不相分、弓矢多ヲ以治  
兵衛へ御□委細治郎兵衛申上候二付、御安堵被遊候由、其後□□ニ  
て又々御心痛被遊候半、庄内混雑倉右衛門との心中私察居候、登面々  
着候ハ、カツカリいたし可申、御殿ニ詰候て兎角寝りかけいたし引取  
候、私共職分調之事ハ大抵ニ出来申候、急出府被仰付罷上候二付、御  
厚書被成候哉、源吾

〔一丁脱落カ〕

いつれも同勢馬とも大丈夫可申上候、障無御座候、少も御懸念可被成下  
間敷候

一、栗毛幸帛七の先生へ頼候処至極嘗候由、何分ニも弱候間、豆沢山付  
候由申越候二付、五合増いたし置候、車等ハ一切見不申、踏落しも相

止候由、道中勞れニ可有之、此頃迄箱根山懸念いたし候得共、止候方  
ハ強噂ニ御座候間、馬懸念ハ少落付候よふニ御座候

一、紋付之鞍早速帛七へ為<sup>レ</sup>置候  
一、着領之義も奉畏候

〔半ページ白紙 最後二行のみ記してある〕

今日三内先ニて□て冷飯食し、腹合悪し、先甚草臥伏し候、十兵衛より  
之書状床中ニて見、此十兵衛は一寸先之事不知ニ、九月中旬より磯釣ニ  
参趣向と申越奇妙く、只今頃は頃盛りニ親子連の道中ならん考く

同七日

天気よし、二万七千之御祝儀御酒御吸物被下置候二付、少早く起候処玄  
関脇風呂敷落居候とて持参二付内見候処、大山春治火事羽織なり、昨夜

六ツ頃より九ツ頃迄廻り候筈、御留守中之仕業と先ツ権蔵呼喚いたし候処、既二昨夜四ツ過歸候処、夜着無之と申二付大騒いたし、外品物有無糺候処外なしと申聞候得共、火事羽織迄被取候哉と早々外品物糺可申帰ル、例刻二相成御殿二出ル、序二権十郎殿長屋ニ至用達し、殿中上下源

座	列
權十郎	權十郎
助	助
權十郎	權十郎

吾御意之趣申聞候、其後御用所にて御酒御吸物被下、権十郎殿二百石被下、秀三郎役料とも三百高御留守下役二相成、一同賑々敷事也、無際限酒日安、

鶴之御吸二万七千石御祝義二肉筋とも印斗差上候、さし身色々、餅積物五品、立派御料理也、一同□られ権十郎殿長屋被引候処、漸帰ル

一、異人沢山参候事、長州合戦相済四十船位も参候為二市中往來いたし候由、將軍家長州御征代(ママ)より大事八日々応接有之由、異人長州と和睦二相成一味いたして、御進發後東都ヲ落候趣向之為ニ応接六ヶ敷、且ツ御進發杯ととても不相成候由、粗噲御座候

一、明月上野へ御成被 仰出候二付、市中固メニ御組御備御人数明半頃さし出候様権十郎殿申越、いつれも是迄無之事にて閉口、夜五ツ半過候事にて問合も不出来、幸世話参居候故、早々二十五人へ為触伏候、日夜京都より早駕籠声真平御免御座候、いつれ容易不成模様ニ可有之、御成被 仰出候事、是又一謀と愚考いたし居候

八日

雨天、今曉八ツ過チャンミとこ通く、クハタく馬足音、小一為見候得共不見と申、夫より能不寝、六ツ頃より支度、一組召連神田橋参ル、大雨大不都合之義有之、此造酒助立腹いたし候内御延引被 仰出大仕

合、今日之固メ一件馬鹿く敷事にて達候事不相成不埒世話焼候得共先ツ相止候、明日□□□事書至來、権蔵來ル、伊兵衛嘶参り四頃迄居、又々早駕籠声胸二障奇妙な世中と相成候、晴夜なり一同は御上屋敷へ明六ツ時御通御目見有之由、七ツ頃より詰候由、両御屋敷遠路大太別也

九日賀祝

諸士之面々ハ七ツ過二神田橋へ出候、節句為祝義平膳二附御地走ハ如山、春之助為祝義参ル、伊兵衛も來ル、三内も來ル、三内申ニは早々御出可被成と申候得共、昨日政右衛門御目見昼過二可有之間、例刻御出仕にて可然と万事模様教示いたし呉候間、落付居候得共、三内催促いたし候間支度いたし出ル、御殿ニ出、上下着し候と見候事、いつれも綿入着し居棧裕也、当着いたし早々綿入取寄セ着し候、昼頃御戻り御次二廻り候義、勤御礼申上候、今日能天気給にて汗ヲ流し綿入礼服にて無扱着しぬ、庄内杯は如何可有御座候哉、当地不時候ニ御座候、雨天之往來閉口至極ニ御座候、三内へ半兵衛・源吾と引取より嘶ニ参ル、夜五ツ半過帰、半蔵出、今日織人殿御出御留守二付御帰、男四郎殿より鯉節一箱・菓子一箱御着為御祝義被遣候、不快度々御尋旁御使参候と申聞候、男四先達てより風邪、廿一日より大騒キ無理ニ出仕候為長々二相成此頃少々快方趣之様子ニ御座候、明十日御組二組御備登面々御酒御吸物被下、書状遣候

十日

鬱陶敷天氣、権蔵床中にて逢、今日之御□之義聞ニ参候得共不知、其節之嘶二佐藤源九郎昨日着候趣嘶いたし、例刻神田橋へ参ル、庄内より書状達シ、久兵衛殿も御小姓頭、九兵衛は蝦夷詰、同僚兩人登、長屋支度主馬斗登候事二いたし置、其外御物頭杯と案内沢山被仰付、とても四ツ屋敷にて不埒明、寺院御借被成候事二いたし候、仮小屋杯と日々小役人大騒、登候面々山拔勢ひ被察候様ニ御座候、此方へ着候て一同カツカリ

といたし可申候、曾弥太も今日着、カヲ落候由、いつれもカツカリ、唯甘物之工風のみ落可申と今日も御備人数へ申含候、登参候面々着いたし候て氣落可申候、従今氣毒千萬、此方之人々御手当見て物好いたし候人沢山有之由、相違いたし後々弱り可申、

明後十二日源吾下候積二付、荒粉

菓子其外少々調物いたし上可申候

と存居候処、源吾御供被仰付、御

飛脚立明日有之候間、是へ頼可申

と存候処、急飛脚にて書状外持不

申趣ニ御座候間、此後之便何□□

上可申候、七日被下置候鶴之肉二

切余り如何敷御座候得共二万七千

石之御祝義被下置候間差上候

一、弓矢多よりも書状達し候、御一同御機嫌能趣恐悦奉存候、女達・伝

吉・文次郎嘸々達者可有之御座候、凧絵は尔今出不申由、出候ハ、調

差下度候、何候心落着不申、道中氣取、脇有之物は多葉粉盆のみ、不

自由至極、別□長州行相成候ハ、捨候外無之故、一切調不申、能物は

干味噌のみ、又々為御登可被下候

一、先便領策へ頼遣候大小之義尚又申上候筈、陶山能上り上り候ハ、相

成丈早く出来候様御頼可被成下候、先達て檜坂行候節脇さし鏝一同困

候趣御座候、御□ぬ者ハ一人も無之

一、今日丸子祖父孫と鱧持参初て逢、色々嘸いたし日那樣へも宜と申聞

候、昨日男四より至来候菓子鯉節遣之

同十一日

今日御飛脚立二付申上候、追々秋氣相模様候得共、益御機嫌能被遊御座



恐悦之至被存候、私も一点之障無之日々精勤罷在候間、少も御懸念ハ被成下間敷候、御征代最早相弛(ママ)ニ無張合義御座候、一同氣込薄相成候様御座候、世中は実ニ一寸先ハ暗ニ御座候、大殿様御引移女男拜見祝義恐悦も最早御登御支度〳〵にて長引可申候得共、御登御心配御物入も勘定もへツマも無御座候事ニ相成大名大弱、加賀様最早御普請ニ取掛と申噂御座候大乱之初いづれ弱病氣ハメニ可相成ハ、一日〳〵と無事暮し居候処ハ有難之存居候より無之、昨夜ハ鱧ニて腹ヲ強し、家来共へも一切ツ、配分、馬豆御座候間、此方之義ハ少も御案被下間敷候、先々折角季候御厭被遊候、奉得幸喜候、以上

松平造酒助

御父上様

御母上様

一、日々楽ミハ出腰より見候へハ美人往来も引不切、百人通候へハ、百

人迄いつれも十六七才より二十才位と見ヘル、能々見候へハ七八十

ハ、腰のししわしみ白髪ヲ染メ、一目白粉白壁之如ク大建縞大抵縮緬

糸織ニ黒天鷲絨半襟掛、駒下駄ヤラあしたにてスン〳〵ハツ〳〵と歩

行風奇妙也、三内参候節嘸いたし候処、下候ハ、私は、も此風ニ仕込

可申候と一同大笑いたし候

女達御両人殿へ

一、御厚意忝存候、御無事珍重〳〵、我等も大丈夫、鹿毛無事、少も御

家事被成間敷候、留守中無人別て御心配可被致候、御返事外ニ進不申、

季四様三郎兵衛様へも宜入□候以上

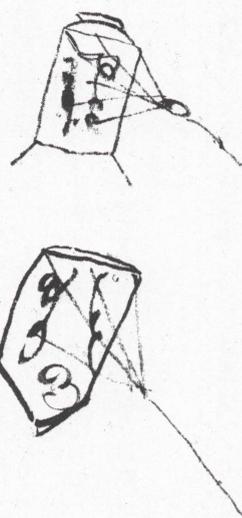
松平造酒助

松平弓矢多様

尚々御序之節、長沢堅様もよろしく

此節風如何御働や被走候てころはじよふ二可被致候、此前遣候甘物最早  
なくならんといたし、其前可被遣候、早速進可申、風絵少過候ハ、下し  
可申、此方之風ハ尾ハ無之、昨日三河町通候処風揚余り走りころひ頭さ  
き

血流し行ヲ見候、  
大用心く



弓ハ尔今不整近々浅草辺参候て整可申候待可被申、はんこひ板尔今出不  
申、見懸次第遣可申候

造酒助

伝吉殿

乳母へ伝吉氣小サキよふ二候迎、余りオトシ申間敷候

文次郎ハ尔今大小不相替世話敷可有之、此所風街道又は立派なる店より  
子共大便いタシ居候模様甚見苦敷か、タ、つなきよふミへる故心付可  
申、茶ノ間住居余りよきとも不被申

造酒助

文次郎との

孝のへ廉末いたし間敷候

凡例

- 一、文字は原則として常用漢字を用いた。変体仮名はすべて平仮名とし  
たが、例外として格助詞の江はへに改めた。
- 一、明らかな誤字・脱字は右傍に（ ）で正しい字を示し、推定できる  
ものは（カ）とした。意味不明の場合は右傍に（ママ）を付した。
- 一、原文中の朱筆は「」で示し、（朱筆）とした。また原文の虫損・破損・  
判読不能の箇所は字数を推定し、□または「」等で示した。
- 一、原文中の抹消文字は基本的に掲載せず、訂正文字のみ掲載した。
- 一、平出・台頭は二字あげ、欠字は一字あげとした。

解題にかえて

庄内藩士松平造酒助の日記の内、前号に引き続き元治元年九月二日〜  
同十二日までを翻刻した。松平造酒助と日記の全体像については前号を  
参照されたい。今回翻刻した分冊のデータは、第二冊は縦二五五cm×横  
一七五cm、十六丁、第三冊は縦二五五cm×横一七五cm、十七丁である。

この年七月下旬禁門の変が起こり、幕府は長州征伐を発令、造酒助も  
出陣することとなり準備に忙殺されるなか、閑を見つけては取り壊され  
た長州藩邸を見つたり（五日）、初めて見た外国人の様子を描いたり  
している。下関戦争前後の長州藩の動向の噂なども書き記している。

（日記の翻刻は根本が行い、古宮が補った）